

# 郷土室だより

## 八町堀襪記 六

安藤 菊 二

### 6 与力子息の年始廻り

八町堀襪記も回を重ねて、再び春が廻ってきた。与力の町の行事は、第2回に元与力原胤昭翁の回想録を掲げたが、翁の令兄佐久間長敬翁にもすぐれた記録がある。それは大正初期に刊行された雑誌『江戸』に寄稿された「嘉永日記抄」それに続く「安政日記抄」で当時の与力の生活ぶりが手に取るように記されている、すこぶる参考になる。

今回は、「安政日記抄」の中から、元日の町奉行所の年始儀式、与力の町の年始廻りの条を紹介しておきたい。

池田英泉の『楓川鎧の渡古跡考』の与力屋敷の地図と対比しながら読むと興味一段と深いものがあるであろう。

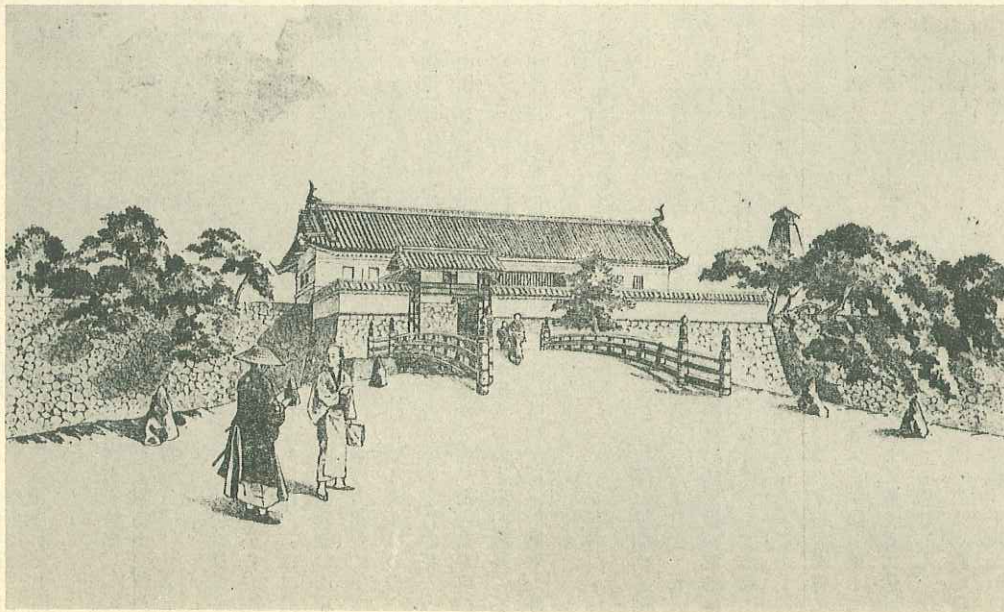
安政日記抄

佐久間長敬

嘉永七年甲寅七月改元安政

元日 熨斗目、あさぎの下着三枚重ね、繻紵、麻上下、白足袋、大小帯剣、印籠、鼻紙入、その外名札まで一切残りなく身につく。下女来て切り火打掛る。若水椽側に備へてあり、新しい手桶、手拭、しめ飾りしてあ

る也。口漱ぐ。また切り火打って、神仏の禮拜。畢而家内一同に送られて玄関に出る。供人は格式通り、侍は麻上下も、立をとる、鎗、挾箱、草履取、物持、箱提灯等揃っている手人と傭人で用を辨ずる也。昔しは乗馬にて手人而已なりしが、泰平の余り何時とはなしに馬をば下女に換ふるやうになれりとぞ。嘆はしき事也。組屋敷から与力五十人、同心三百人同じ時刻に出る。中々にぎやか也。同心は手丸提灯也。南組は鍛冶橋御門、北組は呉服橋御門に向いて行く。御門に達する頃には暁七ツ時(筆者云。)也。御門明きになつてゐる。外下座中張



鍛冶橋御門 「徳川江戸三十六城門畫帖」(千代田図書館所蔵)



大番所とも、礼服にて厳然固居る。御門下を通りて町奉行所へ行く。奉行所前の腰掛茶屋も、大挑灯さげて見世を出している。

五十以上老人は駕籠用いるもあれど大抵歩行く也。下戸は暁の寒さに閉口すれど、上戸は上気元にて、前夜飲過しの連中、唯一人も仮病不動をせず、ひろく出て来るは正直なもの也。

奉行所表門と玄関は、奉行の家来礼服にて固居る。与力当番所は、当番与力一と組五人揃って正面に着座。其前には本年用いべき、新しい

日記帳、申送帳、言上帳、御用留帳、書上帳、諸事留帳、追落帳(是は記すもの)、雑物帳

備られてある也。大晦日宿直の与力も服を改め引継を済まして席にいます。

非番与力は当番の前に着座す。客席ニつく也。広い当番所も、煙草の煙と老分や上戸の大気焔にてにぎやかにしをかけ、下戸と若輩は後に引下って一団となつて待居る也。

此日親子勤めの者は、其悴先に出勤して父の来るを待ち、父が門を入れれば、当番所脇昇降口畳の上に出迎へ復席して父の入を待て平伏す。父は中腰になりて一寸指を畳につきて会

釈し、刀を提げて座に着く也。

其式法行儀正しく、当時中村八郎左衛門は悴次郎八、小原清十郎は養子小十郎、東條八太夫は悴八太郎、保太郎、悦三郎の三人あり、仁杉八右衛門は悴五郎八郎、由比義太夫は悴

万太郎、安藤源之進は悴武左衛門ありて他人に浦山敷思はれ、中にも東條は立派な悴が三人出迎のていかにも得意其面に見れし也。此式法は南番所而已に行れたるにはあらず、北

も同じく昔しより親に対する礼を市人にも知らしむ為め定められしと聞く。平日もこの如く行ふべきなれども悴居合せざる時は行ひ難くて、元

日に限り正式に行はるゝ也。年賀の式は奉行所の内詮議所と唱る広座敷より一の間二の間三の間まで

明け広げて、一の間正面に奉行出席、与力は兩側へ向合て着座し、公用人並奉行の家来は次の間に待座す。

一同惣礼、与力筆頭「御組与力一同年賀を申上る」と惣代にて申陳る。奉行「目出度存す。」

口上の済を見斗公用人二人、青尺黒塗りの三方に切り熨斗を盛りたるを、うやくしく持出して二ツとも奉行の前に出し平伏す。奉行一礼してこれを一ツ、とりて懐中す。公用人は与力筆頭の前に持来りて差置、席を

去る。与力は順にこれを取りて一礼

し次に廻す。席下のもの座の中央に出すと、公用人来りて引去る。惣礼。同心の年賀式になる。支配与力五人、

一の間左右に向合て着座、同心三百人は二の間三の間に詰める。奉行一の間正面に出席

与力筆頭「御組同心一同年賀を申上る。」奉行「目出度存す。」公用人熨斗を持出す。奉行これを請

け三方を其儘置く。惣礼。一同退散。跡に而同心は各熨斗を取去る也。それより支配の石出帯刀、町年寄三人、地割役一人、山田朝右衛門也。

式後与力も同心も向方奉行所へ廻動一と組毎の名札を出す也。南北の与力同心途中にて入り違となり、おめで度の声頗る陽気也。南組は呉服橋。

北組は鍛冶橋を出でて家に戻る。元日は主人出勤したる跡其儘に掃除せずはき出さぬが例にて、家内の者は入湯し髪を結び、身仕度をして主人の帰りを待つ、下女下男までも相

当に衣服を更める也。年の暮よごしし衣類用いるもの一人もなし。帰りの際草履取先に行つて、玄関にて御帰りと叫ぶ。家内中玄関に出迎へるを礼とす。平日も同じ事なれど

年礼の時は正しくする也。主人座敷の床前に着座。刀は刀掛に

納め小刀は帯しいる。家内中皆な出て座に着きお愛度をいう。下女下男は次の間に出て同じくいう。

年礼済むと下女が膳部を持出。  
(次に舞煮、臉、取香など克明に記してあるが「雜記二」に記した原氏の記事に譲つて省略に附す。)

床には、代々譲りものの狩野探幽の筆。中は日の出に福祿寿、左右は松竹梅の三幅対。左右の棚一方には具

足を飾り、一方には古代蒔絵の文庫を置く。白梅は古銅の大花生に生ける。床の隅み柱にある柳かけの釘、春の色菜えて青々と、青竹の花入へ糸柳と白玉椿をさす。梅と福寿草の鉢植は年々出入の植木屋の歳暮にて

二十八日頃に持込、持伝の染附大鉢に植置しもの也。

### ○年始廻り

父の云はるゝに、今年は仲間申も例年の通りに正月の式をすれど、異人申置通り再び渡来らば、世の形勢自づと一変して、後年はいかなる風に推遷りゆく哉知れがたし。ことしの春家々仕来を見て置くが後々参考になりぬべし。廻礼は玄関限り略しておかず、座敷へ通りて能く見て置けとの心にて、閑潰しと思ひしも、父の敵命背きがたく門を出る。直に隣りの茅野雷庵、書家也。上戸なれば朝から飲いる。「いづれ初会にゆる







りと参上」と詞残し、門札にて済ます。次は日吉甚三郎、能役者也。これも門札。次は高橋玉齋、寺子屋にて、幼少の時手習の師也。与力同心の弟子多くもち、稽古場は疊替し、赤毛氈敷詰めて、往還から見通すようにし、先生は麻上下にて見張りいる。門札を許さず、必ず座敷へ上りて年札を述べしむる也。濟而、吟味方二の側筆頭中村次郎八の宅、この人は自分の父に引立られ、旁々別懇の間柄也。夫婦とも大歎にて「お早やん」との挨拶あり。その家庭はなやかにて、紫式部といへば中村の妻女と首肯かれし程、四十女の厚化粧、かいどり惣模様、髪飾りも型の如し。一粒種の幼女花々しく着飾りたれど、きりよりの評判は言はず、富本がよく出来るのも御自慢也との噂斗聞えし。床飾りは探幽の筆、日の出に鶴亀の三幅對、床脇に緋緘の古き具足、これは主人公に少々不似合のやうに思はる。一方の棚には和歌の巻物飾られて、加藤千蔭の崇拜家也。書も千蔭流にて和歌嗜まれ、年のはじめめで度夫婦とも詠出られし短冊を示されたれど、失念せしは愚也。「今年はめつきり成長された」「上下つきは御親父の通りだ」など夫婦唱和、これ等先輩の前に出ては

子供扱にさるゝ也。匆々辞し去る。玄関まで送り出して、下女は紙包を供に渡せり。菓子包也。此菓子も家にて好みあり、珍らしきを旨とするもあれば、年々歳々同じきを嘉しとするもある也。北方与力中村又右衛門の宅記す程の事なし。向屋敷秋山久蔵、北組与力吟味方筆頭也。この人至而質素を好み何の飾りもなき也。主人は留守妻女面会あり。床の間も旅支度の道具取散らしあるを見る。「米国船が来ると御奉行に附いて出張を致せと御内命になつて居るので此通り、今にも直ぐ旅立するやうに用意し居る仕末ゆえ、春の来たのも分りません」といひて心配の体也。子宝多く持てり。向屋敷のこととて皆々出て挨拶す。此家の二女を後年自分の妻に貰ひ也鈴木道順、医者也。門札。安藤源五左衛門南組吟味方也。駒太郎といふ。友達の家記すこともなし。東條八太夫親類交際也。相組の筆頭、役儀は年番方吟味方筆頭にて、第一の勢力家也。其屋敷は近來新築して手広く立派也。玄関は二間口疊は六疊客待が六疊、東むき也。折曲て南向き座敷は、椽側通りに十二疊と十疊と十二疊の三間にて、取付が書院応接の間、次が中の間、奥の十二疊は内容の席也。庭も松そのほかの樹木、と

び石、石燈籠、つくばひ石等都而茶人向の出来也。茶室もあり。その奥に家内の住居と台所などもあり、二階は主人の居間なれど、申に入らねば其模様は知らず。庭の面は松の雪よけ、しきまつ葉等惣て行届き、椽側には細よしのすだれ下ろしあるゆえ薄闇く、座敷内には香をたき籠めあるなど飽まで茶人式也。奥座敷に通る。表の書院には大幅掛けて松竹梅の鉢植飾られてあり、紅白の梅、時を得顔に咲く。第一に目につきしは鬘斗の三方にて、三方は同じ型なれど、此家の鬘斗は黄い亀二足押へ居る也。先客二人いづれも先輩にて親類内のおやじ也。跡からも客足つづく。匆々辞して去れば「御免」の一声。乳臭き兒は下女に送り出さる。床の飾など見る猶豫なし。次の間にて目につきしは、黒糸緘の具足也。これは主人の好みにて新調らしく、いかにもよく見えし也。医師某、書家某、いづれも門札。中田新太郎、佐野十郎左衛門、二軒済む。蜂屋新五郎宅、此人は大酒家にて頗附きの癖のある也。酒の上にて悪口雑言すること年来の習となり、五十以上の先輩も寄らず觸らずに人々心せし也。然し吟味方して世間の事には功者也。座敷に通れば、大胡座に

て二・三人相手に飲いる所。賀詞陳了らぬに忽ち一声「佐久間の小僧来たか、酒を飲め、酒が飲めぬやつは御役に立ぬぞ」と大盃さし附られし也。斯くと見るや妻女は側から口を添て「お若い人は御酒飲まぬがい、倅にも飲ませませんよ。御いそぎだろ。御札が済だら御遊びに御出なさい。歌かるたでも致さう。佐久間の若旦那にはお菓子がいい」と送り出され、道中双六の抜穴出し思せし也。此家は妻女才ありて内助の為に全く保ちいると仄かに聞えしが、自分と同年の男子熊之助はじめ弟妹七八人もありて、幼な友達遊び場所故、其妻女に子供扱さるるは当然也。隣家、仁杉八右衛門支配役、南組与力同心の惣取締役也。役所にては厳然として、規則も行儀も少しも崩さず、此人出勤すれば人々のつま先しづまりて、座敷自づとしづかになる程勢力ありし、六十已上の老練家也。されど家に居ては極々田満にて、若い者を愛し折にふれては心切に教訓あり、性来酒は好まず、老後の楽みは書画にて、中にも集めたる扇面その数数万を算へりと云ふ。「正月の座敷飾などは正しい、よく見て来い」と父に言はれしが、併し窮窟也。成る程床飾り其外行届ているやうなれ



ど、先客ありて嘶し中也。賀詞を陳ぶるや、直に下女に命じ、「若い方は若い連れがいゝ、若旦那の座敷へ御案内申せ」と也。引かれて椽側伝へに若主人五郎八郎今の上杉の父の別構座敷に通る。これは上戸にて、来客二人と酒宴中也。直に吸物膳が出て、甕に角一杯といはれ、盃うけて吸物の覺著にし、酒の相手にならぬやうに取急ぎしかば、床飾りも何にも見落し也。下村録助、中田郷左衛門、中村又蔵、由比義三郎、安藤源之進、金子兵七郎、加藤橋三郎済む。都筑十左衛門、この悍兵右衛門は、叔母御ゆ多親類内也。十左衛門は北方の年番役にて六十已上の老練家なるが、茶の湯にかけては大の天狗にて、武芸も好み嘶し教寄のこととして、若い者相手に毎夜九ッ八ッ時までも嘶しいると也。兵右衛門は吟味方なるが、武術執心にて、黒船渡来已來は武器新に製へる工夫に思を凝しいける程に、床飾り処か座敷中種々の武器とり散してある也。同人の妻とく女は自分母方の叔母にて、跡とり娘一人ある而已なれば、自分を子の如く愛し呉れし也。吸物が出る。いづれも同じ、かもに青な也。鳥渡盃事めて度納めて、あとは尾崎三蔵、小原清十郎、吉田駒次郎、磯貝鋭太

郎四軒並んでゐる。主人は留守也。いづれも記すべき程のことなかりし。中村八郎左衛門、惣筆頭の七十三才になる老分也。此家は必ず座敷に上らねばならぬ也。若手追々集まる。主人は座敷の正面に座して年賀を受けいけるが、その頭はけて、つるりと大葉籠なるに、黒油もて白髪はり付け、蚊のすねかとうしみ蜻蛉のやうな鬚あるは、其休いかにもをかし。相替らずの大元氣氣焰万丈にて若い人々を笑せる。其舌の端から、直ぐ「今日は元日の祝ひに此刀を庭で百遍素振りした。七十を越ても勤めてゐる内は杖はつかぬ」と後ろの刀掛に掛けてある三尺有余の居合刀指しながら、猶もことはつぎで「小便所へ行くにも脇差をさしてゆく。今の若いものは心掛が悪い」と、元日早々お小言頂けば、乍ち「子供等に菓子かみかんを遣れ」と下女に命ずるなど、たれ彼の別なく飽迄こども扱也。此老人書を能くしけるが、好みて古銭を集め、大小の鐔かな具よりその外一切の器物まで銭の形つけて自ら古好道人と号し、当時八町堀の名物男也。悴次郎八別規に召出され分家しけるゆえ、幼少の孫に養子を撰みいて、与力の二三男よび試れど氣に入るもの少く、相続人定らざり

し也。荻野政七これは自分の炮術の師也。玄関のみつき百目五十目の炮三挺、十奴の小銃五挺飾られ、座敷はいつもの稽古場、床の間に目出度かけ物掛けて其前に具足飾られたり。主人は留守、妻女の礼受にて「稽古始にはおゆるりと」の挨拶あり。谷村官太郎、稻沢弥一兵衛二軒すまして、松浦安右衛門、北方年番方にて親類交際の家也。家は類焼後仮普請の儘にて、黒木造りの破れ家なれど、評判の金持也。主人は物外と号し、性書を好みて、閑あれば一室に閉籠りて揮毫に余念なし。孝太郎といへる竹馬の外男女の子供六・七人ありけるが、友達集めていか程騒でも叱らぬといふ氣風ゆえ、家の中は自づと子供の遊び場となり居し也。春は一度近所中の子供招き寄せて福引を催し、大騒ぎやるのを例とせし也。自分も勤に出ぬ前は年々招かれし也。松原晋二郎、中山源右衛門、嶋喜一郎、嶋佐太郎済む。東條八太郎、もと八太夫と一緒に居て広い建家なるが、北の組より南組へ転じ分家したる也。素より親類交際の家なれど、八太郎の妻には未だ面会せしことなし。美人だと評判あれど人に面会するを嫌ひて、仲間中

たれも見たことなしと也。けふ元日盛装して定めし年礼を請るならんと思ひ、主人の留守と取次がいふにも構はず座敷に通る。老分の下女名代に出て「奥さまは御持病ゆえ失礼する」と挨拶あり。座敷は広けれど薄闇くてよく分らざりし也。菓子貰ふ。山崎助左衛門同じ留守也。これも親類交際の家にて、この家の後妻は加賀町の伊勢屋平六といへる豪家の娘にて、年来大名の御殿奉公しいけるを、自分の祖父養女に貰請けて里になり、山崎の妻亡りし跡へ縁附けし也。四十已上の女なるが、御殿風の厚化粧、搔取惣模様、行儀正しく随て下女まで折目正し、座敷の飾も行届ていけれど、御殿勤めし女流の会釈巧なる煙に巻かれて、飾附見る暇なく、吸物が出る屠蘇が出る寸分すきもなし。三村吉兵衛済し、その向屋敷これは庭続きの隣家吟味方原善左衛門也。叔父にて日々出入していけるゆえ一家も同じ事なれど、大の茶の湯教寄のことにて、茶の心得なき奴は行儀が悪いなど、元日早々お小言頂くも気がきかねば、鳥渡年賀を申陳べ、家内雑居の座敷に引下る。恰度「晝飯を待ちいる故手廻をして早く帰れ」と母の伝言ありし所也。此家は親譲りの財産家且は普



請も當主の好みにて万事茶人向に出  
來居り、當時浜町に住居し、千家の  
宗匠川上宗二差図せし哉に聞けり。

この型模して東條は造りしやうに思  
はる。疊敷も同じ事也。叔父は病身  
にて、哀れ命長からじと思ひ、普請  
のみならず道具買入れて、茶道の為  
に数万の金費せし由聞えしと也。今の  
原胤昭の二代前。

中島嘉右衛門北吟味方也。先代嘉右  
衛門ことの外梅を愛せしことゝて邸  
内は数多き梅紅白今を盛りに咲匂へ  
り。座敷の掛物まで梅也。主人は留  
守梅の香に送られて、徳岡政左衛門  
濟し、加藤又左衛門、千蔭の杵也。  
床掛物その外先代の譲りものゝこと  
とて立派也。然し先代とは違ひて、  
よき役は勤められざりし。七十已上  
にてこれも中村と同じく悴分家せし  
ゆえ、養子さがしつゝあると也。



仁杉 英 氏 (『日本橋区史』より)

高橋吉右衛門、北吟味方にて當時重  
役の勢力家也。此家能く整て、座敷  
の飾りも立派なるが、自分草臥れ空  
腹になりて見る元氣もなく、また主  
人も留守なりし、妻女は五十位の人  
なるが「御年始が済だら遊びに御出  
なさい。歌かるたをします」などい  
はる。此家には竹馬の友達ありて、  
数々遊びに往くゆえ、礼受けれて、  
青二才愈以て恐縮、もとのをさな姿  
其儘に引とる。

服部孫九郎北吟味方也。此家の普請  
近ごろ仕直され、他家とは違ひて玄  
関から風変わり也。式台なく二間口に  
て四疊、階段はあり、乗馬の時乗り  
下りの都合よきやうに改めたる也と  
聞く。客待合あり。座敷は中二階造  
り十二疊、南と東に向いて六尺の板  
椽折廻し手摺付けある也。

庭は石を模様にして、座敷下までタ  
タキ、池に水湛て多く金魚を  
放れ置けど、寒中ゆえ霜除け  
してあれば其中は見えず。前  
栽は松と杉などの植込也。床  
の間には唐土の人書ける忠孝  
の大文字軸もの掛けて、前に  
金小さな具足飾られ、脇に  
三方に金のさいはいのせてあ  
り、棚には古銅の壺に白梅を  
投こみ、座の中央に大火鉢一

ッ置きて太い炭炭活け、普通の煙草  
盆二ツ出しありたり。主人は留守妻  
女は病氣とのこと也。名代に出でし  
年寄の下女に、奥の間も定めし立派  
に出来しならんとたづねしに「昨年  
夏已來の騒にて御普請は御見合にな  
り、元の仮建にて御手狭で困ります。  
お馬の部屋は立派に出来てわれ々、  
よりもお馬の方が贅澤であります。

お坊さま、御閑に召しに御出遊ばせ」  
といふ。自分等の生れぬ前から居る  
この狸婆に出会ては、お坊さま呼り  
さるゝ也。めで度仲間の廻禮其他門  
禮終つて帰へる。

新年年禮の客に出ず吸物はいづれの  
家も同じこと也。鴨はいづれも貰ひ  
もの沢山あり。その肉とりて醬油に  
漬置けば十日位は保つ。小まつ菜は  
ゆでである。即ぐまに合ふ也。自分  
家は、父も酒きらひ自分も飲ぬゆえ  
吸もの出すこと少なき也。十日後に  
定式酒出さねばならぬ客来る。大事  
の親類客にて、至て長座、晝後に來  
て夜の四ツ時(午後十時)過まで飲む。一  
人は伯父細谷平次兵衛平次兵衛の父の弟、  
一人は祖父彦太夫後妻の里方津  
輕越中守公用人安西助市、一人は小  
田原町の魚問屋つく平といふ奇人。

一人は四日市の干肴問屋あか治明治石  
右衛門。今の養父、  
右衛門の祖父にて、これは嘶しに身

が入ると、夜の九ツ時(午後十二時)過ぎて  
八ツ時(午前)になつても帰らぬ也。  
此四人は長いお客の名物としてあり  
しが、その外第一番の長いお客あり。

仲間内の重役仁杉八右衛門老人にて  
こは祖父の同役昔なじみ也とて、年  
一二度必ず来る。夕飯頃より来て、  
「今夜は遊びますよ、子供は寝か  
して仕舞なさい」と必ずいふ。昔なじ  
みの藝人など呼び、徹夜して夜明け  
ざれば帰らざる也。この長い間、唄  
ふ踊る隠し芸の数々演じて「若いも  
のには見せぬ。大御所様御代の仕込  
だ」と誇る。老人とは思はれぬ程大  
元氣也。翌日役所に出れば不言の間  
人心自づと肅るを見。前夜とは其人  
違ふかと思はれし程老練家なりしが  
兎に角長座にかけては来客の中番外  
第一に数へし也。今の仁杉  
英の祖父。

(附記)文中、その人役所に出席する  
や、一座肅然と鎮ると評されている、  
仁杉八右衛門の孫仁杉英氏は、明治の  
中期、二〇年から三一年にかけて幾回  
か府會議員に当撰、且三〇年八月から  
三五年五月までの四年九か月は、第七  
代目の日本橋区長として、区政運営に  
多大の足跡を遺された。

ここに遺影を掲げて、その人とその  
父祖を偲ぶよすがとする。